
ゆえ吉のジュースめぐり

氷砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆえ吉のジューズめぐり

【Nコード】

N9788M

【作者名】

氷砂糖

【あらすじ】

魔法先生ネギま！の二次創作です。

夏休みのゆえの一日をかってに想像して書いてみました。

クラスメートと会い、自分を思うゆえ吉。

気になったら見てみてください。

今、私のブームは抹茶コーラです。

私の通っている学校・真帆良学園中等部。そこにはいつも面白おかしなジュースがあります。

のどかやハルナにもいつもおすすめしているのですが、これだけはなかなか共感してもらえないです。

抹茶コーラにも黄金比があつてですね、抹茶・コーラの比率が8・2が私はいちばん好きなのです。

そんな私の悩みは、トイレが近いことです。それもこれも、この学園のジュースが面白おいしすぎるからいけないんですよ。

さて、のどかは図書館ではぐれてしまったし、ハルナは原稿が締め切り間近でエヴァさんの別荘に籠りきりなので、たまには一人でジュースめぐりでもしてみましようか。

……久しぶりに遠出して高等部の方のジュースでも飲みたいですね。

「おお！これは」

どーんとそびえたつ自販機の最上段。

「強炭酸ザクロミルクではないですか」

先週インターネットを見ていた時に来週、真帆良学園で先行発売、と書いてあった強炭酸ザクロミルク。

中等部を探し回ってもなかったのに、こんなところにあるとは……。さすが高等部ですね。

さっそくお金を入れて、

ドキドキ

「と、届かないっ!？」

体をもつと伸ばせば届くかもです。

……プルプル……

びきいっ

「はうっ、あ、足がつってしまったです」

はっ。足音が聞こえます。知らない人にこんな無様な姿を見られるわけには

足が治らない!。来てしまっですー!……ひあ!

「あっ、楓さんではないですか。どうしてこんな処に」

「拙者はさんぽ部でいづるからな。いろんなところを回っているでいづるよ。ニンニン」

「そうなのですか……」

「そういうユエ殿こそどうしてここに？」

「久しぶりにジュース巡りでもしてみようかと思ったので」

「倒れている理由が分からないのでござるが……」

「あの強炭酸ザクロミルクを飲もうと思ったのですが、足がつってしまってますね。愚の骨頂です」

「それは仕方のないことではござる。ええと、これでござるな」

ピッ、がたん

「あ、ありがとうございます」

「これくらいどうってことないでござるよ。では、ちやばばでござる。ニンニン」

背が高いっていいですね。私は、全てにおいて目も当てられぬ悲惨な状況。

あれ、あそこの売店にいるのはまき絵さんと亜子さんでは……

「ミ、ミルク三本下さい」

「私はさ、よ、五本」

私から見ればあなた方も十分羨ましいです。

そういえば、このジュースもミルクが入っているですね。

カシャリ、ゴクゴク……ン。

「おお！」

なんという爽快感。さっぱりしたザク口味に炭酸が効いていて、ミルクでほんのり後味が残る。新種の飲み物です。

「おい。ゆえ吉ー」

あれは、朝倉さんですね。

「ゆえ吉、ちょっと取材したいことがあるんだけど、いいかな」

「いいですけど」

「ありがとつ。じゃあ、立ち話もなんだし、喫茶店行こつ。おごるよ」

「何がいい？」

「カルピスコーヒーをいただきます」

「相変わらず面白いもん飲むねー」

「朝倉さんも一口どうぞでしょう？」

「いや、今はいいや。んで、ゆえ吉はネギ先生のことどう思っている?」

んぐっ、がはっがはっ、けほけほ。

「いきなりなにをいうですか」

「いやね、報道部で真帆良の学際の後から話題急上昇中のネギ先生の記事を作ることになってね。まずクラスの人にいろいろ聞くことになったの」

「それは朝倉さん自身が書くべきでしょう!」

「やっぱ面白そうな人から聞かないと」

「どういう意味ですかっ。まあ、確かにネギ先生は真面目によくやってくれますし他の先生たちより頼りがいがあることもありますし」

「あはは、バカレンジャーのリーダーらしい意見だね」

「尊敬もできるしときどき子供っぽい一面を見せるのもまたいいと思いますけど……って何を言わせるですかっ」

「ははっ、ありがとねーゆえ。イイもんが書けそうだよ」

「書かないで下さいですー」

「じゃねっ」

はあ、嵐のような人でした。

カルピスコーヒーがなんか苦いです。

苦いとか甘いとかは人の気持ちの持ちようによって何とかなるようなものなのでしょうか。こんどよく考えてみるです。

「あっ、ゆえゆえー」

「のどかではないですか。はぐれたのによく見つけれましたね」

「さつき楓さんからこのあたりにいるって聞いたんだー」

「さつきですね、中等部をいくら探してもなかった強炭酸ザクロミルクを見つけたですよ」

「よかったねー。ゆえ」

「のどか、今日は図書館はもういいのですか？」

「うん。残りの時間はエヴァちゃんところで呪文の練習をしよう
と思ってる」

「じゃあそうするです。のどか、一緒にいきましょう」

「プラクテ・ビギ・ナル・アールデスカット」

炎がいつも以上に強く燃え上がった。

「ゆえすーい。調子いいね」

「いいえ、この調子をいつでも出せるようにならなければ」

魔法を知り、ネギ先生に協力すると決めた今。

今日みたいな日常を守るため、みんな無事で帰ってこられるように修行をする。そんな時間。

楽しくもあり、協力することにやりがいを感じる時間。

「よっしゃー。原稿おわったー」

ハルナの声がきこえます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9788m/>

ゆえ吉のジュースめぐり

2010年11月14日01時18分発行